

教育研究業績書

2024年 5月 1日

氏名 石川 希美

研究分野	研究内容のキーワード	
1. 外国語教育	1) 英語 2) 英語教育 3) 英語教授法	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 1) 英語科教員養成のための実践的な指導	平成17年9月～ 平成30年3月	<p>大学の教職課程において、学生が「教科指導に関わる内容について実践できること」を目指している。中学校教員免許取得には必修科目である。本授業では、学生は英語科教育法等で学んだ第二言語習得に関する知見を踏まえ、教師として求められる事柄について体験的に学ぶ。学習指導案を書くこと、模擬授業で教員・生徒の役割を体験すること、英語教育に関する諸問題に関する議論などを行っている。</p> <p>中学・高校での勤務経験から、教育実習を控えた学生が関心や不安に思う学校教育に関わる事柄を、教科指導を通して、さらに学校教育という大きな枠組みで取り上げている。</p>
2) 海外とのTV会議システムを利用した遠隔授業	平成19年10月～ 平成24年3月	<p>海外提携校（ニュージーランド）とのTV会議システムを用いた双方向型授業を実施している。英語でのプレゼンテーションや質疑応答を中心にした活動を通して、コミュニケーション能力の養成を目指す。</p> <p>テーマとしては、身近な内容を取り上げながら日本とニュージーランドの異文化理解につながる事柄や、学生の特性に合わせて工学・科学に関わる事柄を扱っている。工学・科学に関わる具体的な事例としては、電化製品などの普段利用しているものについて、不満・不便を感じる点をニュージーランド側から意見や情報を収集して、その改善点や仕組みを日本側の学生が説明している。</p>
3) 科学実験海外出前授業	平成21年8月～ 平成24年3月	<p>海外研修先（ニュージーランド）で、現地の小学校にて学生による科学実験の出前授業を実施している。「海外で働ける技術者の養成」を目指して、英語と科学・工学といった分野を有機的に結び付けて学ぶプログラムである。</p> <p>学生は、事前に様々な要素（化学薬品、安全性、対象者の年齢・興味関心など）を考慮したうえで実験を選定する。現地では、実験用具、手順、注意事項などを英語で説明しながら、小学生たちと一緒に実験を実施する。「英語で伝える」コミュニケーションだけでなく、「相手に理解してもらおう」ことを体験的に学ぶことにつながっている。</p> <p>この授業実践は、平成18年度より始まった海外研修派遣プログラムの内容を発展させて、現在に至っている。（一連の苫小牧高専の国際化に関わる実践については、これまで平成19年度文部科学省「国際化推進プログラム」、平成20年度文部科学省「国際化加速プログラム」にも採択された。）</p>

事 項	年月日	概 要
4) 基礎演習 I における共同演習	平成24年4月～ 現在に至る	<p>札幌大谷大学社会学部地域社会学科の第一学年における「基礎演習 I」の授業実践の事例を以下に記す。</p> <p>基礎演習 I は、いわゆるゼミナールの授業であるが、現在開講している 8 つの演習 (担当者 8 人) すべてで同じ内容を扱っている。前期は野内良三『日本語作文術』(中公新書) を教科書として使用し、日本語の表現力の育成を図ることを目標としている。</p> <p>授業では、冒頭で、教科書後半部にある定型表現集 (慣用句やことわざ等) の一定ページを範囲とした「確認問題」を実施する。毎回 20 問程度の問題を課すことで、語彙力の強化を図っている。</p> <p>その後、教科書の一定範囲の内容を学生に発表させる。毎回担当者を決め、レジュメの作成を課し、それを使って発表することとなっている。レジュメは、教科書に出てきた難解な語句や人名等を調査して記した上で、教科書の担当部分の概要を示すという形にするよう指導している。こうした実践により、大学での学びの基礎を身につけさせると共に、プレゼンテーション能力の向上も図っている。</p> <p>学生の発表の後、残りの時間を使って、「演習問題」を行う。これは、その時間に扱った教科書の内容と関連する事柄を、問題形式にして実践するものである。学習内容の定着を図るとともに、実際に様々な文章を書いてみることで、日本語の表現力の強化を目指している。</p>
5) 英語演習 I・II における共通教材を用いた指導	平成28年4月～ 現在に至る	<p>習熟度別に 3 クラス展開を実施しているが、共通した評価のために共通教材を作成し、それを用いた指導を行っている。</p>
6) 英語でのアクティブラーニング型授業	平成29年5月	<p>韓国カトリック大学校において、“Global Trend? Local Trend, Youth and Japanese Culture” という特別講義を実施した。海外留学生 (フランス、トルコ、ベルギー、香港、台湾他) と韓国人学生に対して、世界的に活躍する日本人が国際的な仕事について述べている事例や、地域としては小樽の雪あかりの路では韓国や中国からの学生グループがボランティア活動として参加していることなどを紹介しながら、周りのコミュニティを良くするために若者が取り組みたい、支援したい、世の中を変えたいことを討議した。この結果、彼らそれぞれの発言の中から、社会情勢・経済事情、宗教の違い、若者の悩み、困難な状況にある人達に目を向ける機会を持ち、課題を共有することができた。</p>
7) 高校生への研修授業	2019年10月	<p>第36回全商英語スピーチコンテスト北海道予選大会の中で、研修会講師を務めた。大学での授業内容などもおまぜた対話練習やコミュニケーションについて、商業高校・商業科の生徒に指導した。</p>
8) 高校生への講習会授業	2022年8月～ 現在に至る	<p>稚内大谷高等学校の大学進学希望者を対象にしたオンライン授業 (1回90分) である。夏期・冬期休暇中、また月 1～2 回程度の課外授業として実施している。</p>
9) タイでの共同授業	2023年8月	<p>タイのパナピアット経営大学 (PIM) において、「9マス英会話」を日本語学習者向けに紹介し、共同授業を実施した。</p>
2 作成した教科書, 教材 1) 「インターンシップハンドブック」	平成18年3月	<p><札幌国際大学キャリア支援プロジェクト編> (担当部分概要) p. 7</p> <p>札幌国際大学・同短期大学部で共通して、インターンシップの事前研修に使用する教材である。そのなかでも、短期大学部においてインターンシップ科目の位置づけ、およびカリキュラム上でのほかの科目との関連についてまとめた。</p> <p>(執筆者) 沢田隆、武井昭也、五十嵐元一、林美枝子、鈴木義也、椿明美、内山隆、石川希美</p>

事 項	年月日	概 要
2) 「英文読解ストラテジーで学ぶ 科学と人間のための英語読本」 開拓社	平成22年7月	(担当部分概要) <本冊> p. 11, 15, 19, 25, 29, 36, 45, 51, 59, 65 <解答解説集> p. 3~38 人間中心のデザインを提唱しているDonald Norman氏の英文を用いた、英語読解問題および言語や工学にかかわる参考資料や内容理解を深めるための英文読解ストラテジーに関わる解説をまとめたテキストである。 この書籍は2冊からなるのもので、1冊目(本冊)は学習用に、英文および設問、内容理解を深めるための科学・工学に関する解説、英文読解ストラテジーが紹介されている。2冊目(解答解説集)は、設問の解答やおもに英語の語彙・語句、文法などに関わる英語学習のための解説を載せている。 本冊の10ユニットすべての設問および別冊の解答・解説集の全訳や用語解説にかかわる部分を担当、協力した。 (編著者) 沖本正憲 (共著者) Donald Norman (編集協力者) 沖本美奈子、村本充(執筆協力者) <u>石川希美</u>
3) 英語演習 I・IIにおける共通教材	平成28年4月～	共通で使用する教材を作成した。特に、小テスト(Unit1-24)、まとめテスト(中間・期末の全4回分)、復習教材(4回分)を担当した。 授業担当者: 久野寛之、柴田晶子、 <u>石川希美</u>
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 札幌大谷大学社会学部の設置認可申請に伴う教員評価 2) 自己点検・評価 評価結果 3) 学生による授業評価、教員による相互評価等の結果	平成23年4月	研究上の実績並びに職務歴を本学部の専任教員採用規程に照らし、担当科目を教授する資質は十分に有すると評価する。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年月日	概 要
1 資格, 免許 1) 資格 ①留学カウンセラー	平成20年11月	JAOS(海外留学協議会)認定(2023年11月資格更新)
2) 免許 ①中学校教諭一級普通免許状(英語)(平7中1普第531号)	平成8年3月	平成30年1月更新講習修了済み
②高等学校教諭一級普通免許状(英語)(平7高1普第1104号)	平成8年3月	平成30年1月更新講習修了済み
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		

事 項	年月日	概 要
4 その他		
1) 苫小牧市緑陵中学校 学校評議員	平成22年4月 ～平成24年3月	任期1年、年度ごと更新
2) 論文査読委員	平成22年5月 平成24年 平成25年 平成27年 2019年 2022年	平成22年度全国高専教育フォーラム・教育教員研究集会 SPELT Journal Vol.1～（現在に至る） ESP Hokkaido Journal Vol.2 ESP Hokkaido Journal Vol.3 北海道英語教育学会紀要（HELES Journal）19号 Research Bulletin of English Teaching, No. 18, JACET Hokkaido
3) 留学生交流促進センター運営専門委員会	平成23年4月 ～平成24年3月	独立法人国立高等専門学校機構留学交流促進センター
4) 審査委員	平成24年10月 平成25年4月 平成26年11月	第4回全道高等学校英語ディベート大会（札幌市） 北海道高等学校文化連盟第1回全道高等学校英語プレゼンテーションコンテスト 北海道高等学校文化連盟 第15回全道高等学校英語弁論大会【ディベートの部】（札幌）
5) 運営委員	平成28年6月～ 平成29年3月 平成30年12月、 2019年12月 2019年 2022年	大学英語教育学会国際大会組織委員会支部（第55回）運営委員 JAAL in JACET学術交流会（第1回、第2回）運営委員 大学英語教育学会JACET創立60周年記念ウィーク特別委員会委員広報チームチーフ（2021年6月30日まで） 日本カナダ学会第47回年次研究大会 運営委員
6) 通訳	平成25年11月 平成26年12月 平成27年11月 平成28年10月 平成29年2月 平成30年9月	北海道キャリア教育職業教育フォーラム基調講演 Dr. Bonnie Watt-Malcom(University of Alberta, Canada) 北海道キャリア教育職業教育フォーラム基調講演 Dr. Bonnie Watt (University of Alberta, Canada) 北海道キャリア教育職業教育フォーラム研究報告 Mr. Don Middleton (Calgary Board of Education) Mr. Rob Calver & Mr. Oakley Cooper (Iron Workers Local 725) 日本キャリア教育学会第38回研究大会 北海道キャリア教育職業教育フォーラム2016基調講演 Dr. Nancy Arthur (University of Calgary, Canada) 2017冬季アジア札幌大会 公式通訳（プロトコルアシスタント） 北海道キャリア教育フォーラム基調講演およびシンポジウム Mary-Lynn Wardle (Calgary Youth Attendance Centre, West View School) チョイ・ジョンウン(韓国青少年政策研究院 研究員)
7) 講師	平成26年7月 平成27年5月～ 6月 平成29年5月 2019年9月 2019年10月 2021年8月～ 現在	美唄サテライト・キャンパス「プレゼンテーション能力のUP!」 岩手大学教育学部 「英語科教育法特別演習Ⅱ」（集中講義） 韓国カトリック大学校 招待講師（特別講義） 札幌大谷大学公開講座「学びなおしの英語」 2019年度第36回全商スピーチコンテスト北海道予選大会研修会 講師 稚内大谷高等学校 講習会講師（英語担当）
8) 委員	平成23、24年 2018年4月～ 2020年3月	王子総合病院附属看護専門学校 作問採点委員 独立行政法人大学入試センター教科科目第一委員会委員

研究業績等に関する事項

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
<p>(著書) 1. 『ビジネスコミュニケーションのための英語力—英語の壁を打ち破ったビジネスパーソンの成長要因』</p>	<p>共著</p>	<p>2024年3月</p>	<p>朝日出版社</p>	<p>国際的な業務に携わるビジネスパーソンはどのように自身の英語の「壁」を乗り越えているのか、その“成長要因”を、産学連携の調査研究を通して大規模調査結果を根拠としたデータと共に可視化した。</p> <p>結果から、①ビジネスコミュニケーションに必要な英語力について、ある一定のレベルから「壁」が存在すること、②ビジネスパーソンの役割や対峙する相手によって求められる英語力の“質”が変化すること、質の変化を促す要因は、A) 相手を常に意識した英語力の習得、B) ビジネスパーソンの成長段階に応じた業務・役割に根差した英語力の習得、C) 「壁」を突破したビジネスパーソンは、コミュニケーションの際に「相手」して、目的(Purpose)、受け手(Audience)、内容(Information)を踏まえた形式・伝え方(Language Feature)に精通している、③ビジネスコミュニケーションのための英語を使用する「場」の必要性がある。</p> <p>(監修) 内藤永・寺内一 (編集) 山中司・石川希美・マスワナ紗矢子 (著者) 一般社団法人大学英語教育学会産学連携事業成果出版特別委員会・一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会</p>
<p>(学術論文) 1. “Rhetorical Patterns of Academic Writing by Japanese Speakers” (Directed Research)</p>	<p>単著</p>	<p>平成11年4月</p>	<p>Unpublished Research (California State University, Long Beach) pp. 1~44</p>	<p>カリフォルニア州立大学ロングビーチ校に在籍する学生すべてに課せられる英語エッセイ試験WPEに関して、日本人学生が書いた英文エッセイを分析・考察した。合格基準に達した者と達しなかった者を比較したところ、構成が整って具体例など根拠を示し、説明が十分された論述力に差があることが明らかになった。ELSで指導される書き方は基本的には必要であるが、学位取得を目指す留学生に対しては、考えや意見を明確に述べることと、明示的に示す文章構成法を指導することの必要性が高いといえる。</p>

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 2. “Do you speak English?” : An Approach to Communication Skills Development in Basic Speaking	共著	平成18年3月	札幌国際大学紀要第37号 pp. 9～22	(共同研究につき本人担当部分抽出不可能) スピーキング授業について、Basic Speakingという授業科目における実践と考察をまとめた。英語化指導法や学習者の動機付けに関する先行研究をもとに、新しくこの科目を設定するにいたった経緯や科目履修者のこれまでの英語学習経験、科目のカリキュラム上での位置づけといった指導に至るまでに考慮した点を考察した。また、授業で扱ったテーマやそのやり方などについて説明し、すべての授業終了後に実施した事後アンケートの結果を分析し、今後の課題点について論述した。 (共著者) <u>石川希美</u> 、藤垣エミリア
3. 苫小牧高専における国際学術交流派遣実施報告	共著	平成19年3月	苫小牧工業高等専門学校紀要第42号 pp. 123～134	(共同研究につき本人担当部分抽出不可能) 苫小牧高専における国際化の活動として、ニュージーランドにあるポリテクと学術交流協定を締結するにいたった。また、それと時期を同じくして提携校に学生を派遣した。事前研修として学校内で行った事柄、また現地での研修の日程およびその内容について詳細に述べた。研修後に実施したアンケート結果について考察し、今回の課題点、今後に向けた改善点を整理した。最後に、苫小牧高専と海外学術交流提携校との交流について全般的な総括を述べた。 (共著者) <u>石川希美</u> 、松田奏保
4. 苫小牧高専第3回英語学力テスト実施報告	共著	平成19年3月	苫小牧工業高等専門学校紀要第42号 pp. 100～122	(全体概要) 外部団体が作成する学力模擬試験は、高校などでは一般的に実施されている。しかし、これまで高専ではこのような試験にあまり積極的に取り組んでこなかったところが多かった。苫小牧高専において、年一回本科の全学年全学生を対象にした英語学力テストが導入され、3年目を迎えた。この3回目の試験実施結果およびこれまでの試験との比較を行った結果について調査した。 (担当部分概要) pp. 14～22 「6. 事後アンケートの結果分析」 苫小牧高専では英語学力テストを実施しているが、そのテスト後に、試験を受けた学生たちおよび試験の運営にたずさわった教員に対してアンケートを実施し、その結果の分析と考察をまとめた。 (共著者) 東俊文、堀登代彦、松田奏保、 <u>石川希美</u> 、小野真嗣

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 5. TV会議システムを用いたニュージーランドとの遠隔授業実施報告	共著	平成20年3月	苫小牧工業高等専門学校紀要 第43号 pp. 39～53	<p>(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p> <p>TV会議システムを利用して、苫小牧高専とニュージーランドとの間で遠隔授業を実施した。この取り組みで設置された設備機器、日程や授業内容などの概要をまとめた。また、4回分の授業後に実施したアンケートについて、苫小牧高専側およびニュージーランド双方からデータを取り、その結果を分析した。その考察から、授業回数、授業内容、授業準備に関わる負担、よりスムーズな進行などが、今後改善すべき課題であるという結論に至った。</p> <p>(共著者) 松田奏保、<u>石川希美</u>、小野真嗣</p>
6. 実践的テーマによる国際産学連携CEの推進	共著	平成20年3月	苫小牧工業高等専門学校、平成19年度大学教育の国際化推進プログラム(海外先進教育実践支援) 成果報告書 pp. 1～46	<p>(担当部分概要)</p> <p>pp. 18～24 「派遣学生に対するCEの実践」</p> <p>国際産学連携プログラムの概要をまとめた。派遣学生は、環境問題をテーマに、ごみ問題の取り組みについて企業見学・調査を行った。また、サステナビリティ(地球環境を維持しながらの社会活動)というテーマで、他国からの留学生とともに討論を実施した。これらの活動ののち、学生たちは学習内容をパワーポイント資料にまとめ、現地からTV会議を使って苫小牧高専に向けて発表した。また、今回の活動についてアンケート調査を実施して、その結果をまとめた。共同教育、学習者参加型の教育活動の効果について考察した。</p> <p>(共著者) 松田奏保、<u>石川希美</u></p> <p>pp. 25～34 「IV 専攻科における海外遠隔授業の実践」</p> <p>TV会議システムを利用して、講義形式の授業と参加型授業を実施した。遠隔授業後のアンケート調査から、自国や相手国の言語や文化への関心を高められることがわかったほか、学生は、英語の聴解力が不十分と感じているが、英語を使用することには積極性をみせ、相手との交流をより深めたいと思っていることがわかった。</p> <p>(共著者) <u>石川希美</u>、松田奏保</p>

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 7. 実践的テーマによる国際産学連携共同教育の推進 (査読付)	共著	平成20年8月	平成20年度高専教育講演論文集 pp. 63～66	<p><独立行政法人国立高等専門学校機構主催 平成20年度教育教員研究会 機構理事長賞受賞></p> <p>(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p> <p>苫小牧高専で目指す国際産学連携教育のもつ意義、また海外交流協定や地域企業との産学連携などを基盤にした、教育活動を実施するに至った経緯を述べた。また、国際産学連携教育の実施内容にも言及し、実施後にアンケート調査を実施した。その結果を分析し、この教育活動の効果を検証した。前項のアンケート結果を踏まえて、今後も海外との連携を図りつつ、より専門性の高い教育を目指すことが必要という結論を導いた。</p> <p>(共著者) 松田奏保、石川希美</p>
8. 苫小牧高専における国際化推進プログラムについて (査読付)	共著	平成20年9月	工学教育 Vol. 56, No. 5 pp. 31～35	<p>(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p> <p>高専において、地域連携に加えて国際化教育に取り組む機運が高まってきたこともきっかけとなって、苫小牧高専で国際化教育に取り組み始めた。海外の人たちとの交流、異文化コミュニケーションの体験を一過性のものではなく、より系統だった教育効果を上げることを目指して、遠隔教育という形態で授業に取り入れた。この実施概要と結果について論述した。</p> <p>(共著者) 中野渉、石川希美、松田奏保、小野真嗣</p>

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 9. 実践的テーマによる国際産学連携CEの促進	共著	平成21年3月	苫小牧工業高等専門学校、平成20年度大学教育の国際化加速プログラム(海外先進教育実践支援) pp. 1～50	<p>(担当部分概要) pp. 8～22 「Ⅱ CEの実践」 国際共同教育では、工学に関わる「ものづくり」をテーマに、海外研修紹介CD-ROM制作を実施した。2週間の派遣期間中は、英語でのインタビュー原稿の作成、実際の取材・撮影が主に行われた。帰国後に完成させたものはCD-ROMのほか、学校HPに掲載された。 また、海外提携校におけるプロジェクト型インターンシップの取り組み発表を聞き、教員学術交流を通じて、高専との教育の改善への示唆を得た。</p> <p>(共著者) <u>石川希美</u>、松田奏保、工藤彰洋、大橋智志</p> <p>pp. 23～35 「Ⅲ 専攻科における海外遠隔授業の実践」 前年度の反省を踏まえて、授業頻度の調整などを行った。また、高専として工学・科学の専門性をとり入れた新しいテーマも実施した。言語や文化への関心を高めることにつながった。一方、学生は英語使用の不安や使用機会を増やしたい意見があり、少人数での授業を希望することがわかった。</p> <p>(共著者) 松田奏保、<u>石川希美</u></p>
10. 高専における実践的英語コミュニケーション活動を中心とした海外遠隔授業の取り組み-英語が使える技術者の養成を目指して-(査読付)	共著	平成21年3月	全国高等専門学校英語教育学会研究論集第28号 pp. 25～34	<p>(共同研究につき本人担当部分抽出不可能) 遠隔教育において、TV会議システムは近年よく利用されるメディアの一つであるが、これは遠隔授業が大学等高等教育機関において履修制度化されたことも一因である。このシステムを利用した授業に期待される教育効果や先行実践事例について述べた。また、英語教育の点からの教育効果も考察した。苫小牧高専ではTV会議システムを利用した遠隔授業をニュージーランドとの間で実施した。実施内容のほか、双方の参加への調査により判った課題と今後の改善点を総括した。</p> <p>(共著者) <u>石川希美</u>、松田奏保、小野真嗣</p>

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 11. 学術交流協定校との国際共同教育の実践 (査読付)	共著	平成22年3月	高専教育 (独立行政法人高等専門学校機構論文集) 第33号 pp. 733～738	(共同研究につき本人担当部分抽出不可能) 国際社会で働く技術者を目指すという目標の下にこれまで実施されてきた共同教育の2つの事例について言及した。その取り組みを実施していくなかで明らかになった課題点、およびその改善について論じた。また、今後の教育課程の充実につなげられるような方策について整理した。 (共著者) 松田奏保、石川希美
12. 苫小牧高専における海外研修プログラムの構築 (査読付)	共著	平成22年3月	全国高等専門学校英語教育学会研究論集 第29号 pp. 101～110	(共同研究につき本人担当部分抽出不可能) 苫小牧高専における海外研修プログラムについては、少しずつ変化をしながら今日に至っている。まず、その海外研修や国際化教育を推進していくための運営組織とその形態について言及した。海外研修プログラムの実施内容を総括し、プログラムを実施するなかで出てきた課題について分析した。研修時期と参加者数の問題、研修内容の準備といった点が判明した。海外研修プログラムを継続するにあたり、課題点の解消を目指しつつ、今後検討すべき新たな可能性や方向性について論じた。 (共著者) 石川希美、松田奏保
13. プレゼンテーション能力向上に関する一考察ー高校生プレゼンテーションコンテストの事例を踏まえてー	共著	平成23年3月	苫小牧工業高等専門学校紀要 第46号 pp. 53～58	(共同研究につき本人担当部分抽出不可能) 高校生のプレゼンテーションコンテストの事例を分析している。これらの事例を踏まえながらも、教科を通じてプレゼンテーションを指導するにあたっては、高専という学校上の特性を活かしていくことや、指導内容や方法については科目連携や専門科目を意識した取り組みの可能性について論じている。 (共著者) 石川希美、吉岡亮

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 14. 英語プレゼンテーション指導のもつ可能性—高専生の英語コミュニケーション能力の養成—	単著	平成23年3月	苫小牧工業高等専門学校紀要 第46号 pp. 59～66	英語のプレゼンテーションを扱った授業や教育活動について、大学の授業例と比較しながら、苫小牧高専の事例から、高専の教育活動の特徴と、今後の指導の可能性を論じている。大学の工学系学部においては、国際会議、学会発表を視野に入れて、少人数授業や個別発表といった取り組みがされているが、高専においては、コンテストや遠隔授業を利用したグループ発表が取り入れられている。よって、発表内容の専門性は大学のように要求されていないものの、自分たちのアイデアを英語にしていくことと、グループで協調作業を重視していることが特徴である。英語プレゼンテーションの評価については、これまで確立されたものがないが、話し手の説得力、熱意、自信について聞き手の評価が分かれるため、「聞き手に伝えること」を意識した指導が求められる。
15. 高専生の英語学習状況に関する高校生との比較調査—英語表現力養成への課題— (査読付)	単著	平成23年4月	北海道地域総合研究 ((社)北海道地域総合研究所) 第1号 pp. 27～35	高専1年から3年生は学齢的には、高校生と同等であるが、高専が高等教育機関に属していることもあり、一般の高校生の状況と比較されることは少ない。本稿においては、高校生対象に実施された調査に基づいて、高専生の英語学習状況について調査結果を分析した。
16. 海外研修の教育的効果と今後の課題—コミュニケーション能力の育成— (査読付)	単著	平成23年4月	実用英語教育学会紀要 (実用英語教育学会) 第1号 pp. 26～37	海外留学者数は減少してきているが、学校などの教育機関においては海外研修、海外インターンシップや国際交流の機会をもうけることも増えており、その教育的効果が問われるようになってきている。言語習得への効果、また動機づけや英語使用不安といった個人差への影響などの先行研究をまとめながら、今後海外研修など、英語を使つてのコミュニケーションを実践したり、指導したりする上での課題点について論じた。
17. 英語学習状況に関する調査—高専生の英語嫌いと学習意欲— (査読付)	単著	平成24年3月	全国高等専門学校英語教育学会研究論集第31号(全国高等専門学校英語教育学会) pp. 41～50	本稿の調査から、高専での英語学習情意は「好きでも嫌いでもない」、「嫌い」の順に多く、高専生は「英語が嫌い」、「英語が苦手」と言われる状況と重なる。特に、小学校・中学校時代から英語が嫌いになっている割合が高く、それが高専まで尾を引いている状況が男子学生に顕著である。男子学生が多数を占める高専においてはその傾向がより強くみられる可能性が考えられる。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 18. 大学入学レベルにおける英語ライティング能力育成の課題—英語総合能力判定テストの結果から—	単著	平成25年3月	札幌大谷大学社会学部論集(札幌大谷大学社会学部) pp. 77-97	熟達度試験として実施した内容から、手紙文への返事を書くというライティングタスクの結果を分析した。全員がタスクを遂行できたが、一方で英語で書く経験不足に起因するミスや、状況にふさわしい書き方ができていない点が明らかとなった。継続的で、かつ習熟段階にふさわしい指導を行っていくことが課題である。
19. 英字新聞の内容理解と読解処理—日本語でまとめた概要からみえる傾向—	単著	平成26年3月	札幌大谷大学社会学部論集第2号(札幌大谷大学社会学部) pp. 49-65	英字新聞の内容について日本語でまとめるタスクの結果について分析した。全員がタスクには取り組んでいたが、要約する内容については、取り上げるセンテンス、書いてある内容は、個人差が大きいところも見られた。傾向としては、ヘッドライン、リードについては書かれている、パラグラフに2文以上ある場合には、1文目についてまとめたものが多い。また、文が長く構造が複雑になると、意味の取り違えがみられる傾向があった。英字新聞の内容理解は、語数だけでなく、文構造、語彙レベルなどにも影響がある可能性が示唆される。
20. 社会学部英語科目における書く活動の試み	単著	平成27年3月	札幌大谷大学紀要45号(札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部) pp. 83-90	1年間通じて授業内でエッセイライティング活動を実施した。その実践内容を総括し、アンケートからは学生は英語で書く活動を有益なものとして捉えていて、自分で選んだトピックについて書くことを好むことがわかった。 また、ライティングに関する先行研究では大学生は英語で書くことそのものに不慣れであることが示されている、一方では大学において目標とする英語で書く力についてCEFR-J、英検CAN-DOリストから、上級になると説得力ある論述ができることが書く力を示すものとなっている。 説明文、説得文(意見論述)について指導していくことが必要だと考えられる。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 21. 英語ライティングの変化: 前期と後期を比較して	単著	平成28年3月	札幌大谷大学社会学部 論集第4号 (札幌大谷大学社会学部) pp. 17-31	前期と後期に書かせたエッセイについて、量的な観点から比較した。1つは、前期と後期で同じテーマについて書かせたものである。授業内で同じテーマや意見論述を求める文章は取り組ませていないため、学習の影響については最小限と思われる。2つ目は、それぞれ授業中に取上げたテーマで書かせたものである。大きな語数の変化はあまり見られないものの、調査対象の15名の差が縮まる傾向が見られた。特に、授業タスクについては、その傾向が顕著となった。学生自身で各自の作品について比較させたところ、ライティングの質に関する記述がみられた点特徴的である。
22. 教職科目におけるアクティブラーニング —ポスターセッションの手法を用いて	単著	平成29年3月	札幌大谷大学社会学部 論集第5号 (札幌大谷大学社会学部) pp. 57-74	学生同士が考えや意見を共有することによって学ぶ点が多いという学生の意見を元に、レポート課題をポスターセッション形式に変更を加えて実践した結果を考察した。各自が選択した課題を発表し、理解を深めることができた一方、レポート課題からは実際に中高生に指導することに活かす視点がないものも散見された。特に、文法事項の指導において、顕著な傾向だった。 授業結果やアンケートから、授業課題の目的・目標を認識させる必要性があることが明らかになった。
23. アンケート調査から見る英語科教職課程履修学生の特徴—卒業後の進路・英語力・海外経験を中心に—	単著	平成30年3月	北星学園大学教職課程 年報第1号 (北星学園大学) pp. 73-82	教職課程履修者の大半は免許取得のみを目指すことが言われているが、アンケート調査から英語科教職課程履修学生は広く教育に関わる仕事を希望していることが明らかになった。
24. 実践的インタラクション活動の取り組み—スピーキング能力の養成を目指して—	共著	2019年3月	札幌大谷大学紀要49号 (札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部) pp. 73-82	実践的なタスクをもちいた取り組みについて取り上げ、授業における課題について論じる。タスクでは、テキストで学んだ内容を使いながら、応用させていくことをねらいとしている。 (共著者) <u>石川希美</u> 、 <u>山田政樹</u>
25. The Effect of Practical Interaction Task Training on Learners' Motivation and Attitudes— Usefulness of 3x3 table English training— (査読付)	共著	2021年3月	ESP Hokkaido Journal, Vol 4, pp. 1-21	スピーキングトレーニング前後で実施したアンケート調査結果を分析したところ、英語を話すことに積極的になり、間違えることに対する抵抗感が減る傾向が見られた。 (共著者) <u>Nozomi Ishikawa</u> , <u>Masaki Yamada</u> , <u>Toshiyuki Sakabe</u> , <u>Hisashi Naito</u>

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 26. 実践的インタラクティブタスクトレーニングがスピーキング能力へ与える影響－発話量の変化から見る9マス英会話トレーニングの有用性－ (査読付)	共著	2021年3月	ESP Hokkaido Journal, Vol 4, pp. 22-36	スピーキングトレーニング前後の発話量を調査して、語数の増加がみられた。即時応答するというトレーニングは効果的であったことがわかった。 (共著者)山田政樹、 <u>石川希美</u> 、坂部俊行、内藤永
27. オンライン授業における英語スピーキング実践	共著	2021年3月	札幌大谷大学紀要51号 (札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部) pp. 1-12	コロナ禍において、対面授業ができなくなり、オンライン型で実施したスピーキング授業実践についてまとめ、考察している。 (共著者)山田政樹、 <u>石川希美</u>
28. 4技能テスト結果からみる『9マス英会話』のトレーニング効果 (査読付)	共著	2022年3月	JAAL in JACET Proceedings, Vol. 4, pp. 94-99	即時応答のトレーニングの前後で、4技能テストを受験した学生50名について調査した。受容技能(読む、聞く)は伸びがみられたが、産出技能(書く、話す)ではスコアの下落がみられた。学生へのアンケートとも併せて分析したところ、このトレーニング(『9マス英会話』)は、やり取りを行っていくことから、正確に意味を理解するという点で受容技能をあげる点に作用していると示唆される。 (共著者) <u>石川希美</u> 、山田政樹、坂部俊行、内藤永
29. 持続可能な地域づくり－多文化共生社会がもたらす地域創生	共著	2022年3月	札幌大谷大学社会学部論集(札幌大谷大学社会学部) pp. 45-78	日本に住む外国人の人口が急速に増加・多様化しているなか、SDGsの理念を用いて、多文化共生社会の考え方を提示し、札幌市の取り組み事例などを記述することで、今後の多文化共生の促進が「持続可能な社会」の実現にもたらす影響を考察している。 (共著者)大高紡希、 <u>石川希美</u>

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 30. コロナ以降の企業が求めるビジネスコミュニケーションの変化—予備調査(プレアンケート調査とプレインタビュー)結果から— (査読付)	共著	2023年3月	JAAL in JACET Proceedings, Vol. 5, pp. 45-52	<p>本研究は、デジタル技術の発達とコロナ禍がビジネスコミュニケーションにもたらした影響と変化について、予備調査として実施したアンケート調査とインタビュー調査の結果をまとめている。アンケート調査からは、翻訳アプリ等の言語的な支援ツールの活用により、業務が効率化している一方で、オンライン会議では、話し手の態度や聞き手の理解度などを把握することや信頼関係の構築が困難であることがわかった。またインタビュー調査から、英語支援ツールの活用度合や目的は業務内容によって異なること、リアルタイムの文字コミュニケーションであるチャットの有用性、文化的背景の異なる相手との相互理解を向上させるための確認作業の増加が示唆された。</p> <p>(共著者)石川希美、山中司、山田政樹、三橋峰夫、三木耕介、小川洋一郎、内藤永、寺内一</p>
(口頭発表) 1. “Add a little humor to your class” 2. An Approach to Communication Skills Development in an English Speaking Class	共同 共同	平成8年10月 平成18年9月	Los Angeles Area Regional CATESOL (会場California State Polytechnic University, Pomona) 第23回JALT(全国語学教育学会) 北海道支部大会 (会場 北海学園大学)	<p>(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) 英語学校(ESL)の授業のなかで、ユーモアの要素をどのように指導に組み入れているのかを発表した。実際に英語の授業で指導したケースを説明し、またユーモアだと理解されない場合や授業で扱うのにふさわしくないユーモアの実例を紹介した。</p> <p>(共同発表者) Barbara Jonckheere, Nina Skokut、<u>石川希美</u></p> <p>(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) これまでの学習経験上それほど英語で話すことに取り組んでいないにも関わらず、学習者の目標とする英語力は非常に高い。コミュニカティブ・アプローチや学習者中心指導法の観点にたちながら、基礎的なスピーキングの授業を実践した際の結果と学生の反応、課題点について述べた。</p> <p>(共同発表者) <u>石川希美</u>、藤垣エミリア</p>

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(口頭発表) 3. 実践的テーマによる国際産学連携共同教育の推進	共同	平成20年8月	平成20年度教育教員研究集会 独立行政法人国立高等専門学校機構主催 (会場 学術総合センター)	<p><機構理事長賞受賞> (共同発表につき本人担当部分抽出不可能) 苫小牧高専では、ニュージーランドの教育機関とそれぞれの地域企業などとも協力しながら共同教育活動を実施した。平成19年度には、環境教育をテーマに、ニュージーランドからTV会議システムを通じて学生はその成果を報告した。また、より多くの学生を対象にした教育活動として、国際遠隔授業を実施した。これらの活動に関するアンケートではおおむね良好と判断された。専門教育とも関わる教育活動にできるかどうか課題である。</p> <p>(共同発表者) 松田奏保、<u>石川希美</u></p>
4. 理工系学生を対象としたTV 会議システムによる海外学術交流協定校との遠隔授業に関する実践報告 —英語が使える技術者の養成を目指して—	共同	平成20年8月	JASELE (全国英語教育学会) 第34回東京研究大会 (会場 東京女子大学)	<p>(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) 苫小牧高専では、ニュージーランドとの間で遠隔授業を実施した。このとき相手と直接対面するため、即時に応答することが求められること、また言語以外の身振り手振りや表情といったコミュニケーション手段も利用することを学生は体験的に学ぶ。英語に苦手意識を持つ学生が多いが、「相手に伝えるためにはどうしたらいいか」という点に意識を向けさせることが有効であるとわかった。</p> <p>(共同発表者) 小野真嗣、<u>石川希美</u>、松田奏保</p>
5. 高専における実践的英語コミュニケーション活動を中心とした海外遠隔授業の取り組み-英語が使える技術者の養成を目指して—	共同	平成20年9月	COCET (全国高等専門学校英語教育学会) 第32回研究大会 (会場 国立オリンピック記念青少年総合センター)	<p>(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) 産業界の要請や社会的状況も考慮すると、高専での英語教育の重要性は増している。そこで、実際に対話できる機会をもうける方策として、苫小牧高専では、ニュージーランドとの間で遠隔授業に取り組んだ。TV会議システムでは相手と直接対面するため、即時に応答することが求められる、また言語以外の身振り手振りや表情といったコミュニケーション手段も利用できることを学生が体験した。</p> <p>(共同発表者) <u>石川希美</u>、松田奏保、小野真嗣</p>

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(口頭発表) 6. 苫小牧高専における海外研修プログラム構築	共同	平成21年9月	COCET (全国高等専門学校英語教育学会) 第33回研究大会 (会場 京都府中小産業会館)	(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) 苫小牧高専では、国際化の推進を目指し、平成18年度にニュージーランドの国立ポリテクニクである Eastern Institute of Technology, Hawke's Bay (EIT) との間で学術交流協定を締結、同年より海外研修を始めている。その内容は、語学学習のほか、高専として工学や科学に関わる研修内容や産学連携教育をとり入れた共同教育を実践する研修プログラムとなっている。EITと協定を結ぶまでの経緯、高専が目指す教育と国際化、研修内容とその結果、今後の課題などを述べた。 (共同発表者) 石川希美、松田奏保
7. 英語学習状況に関する調査—高専生の英語嫌いと学習意欲—	単独	平成23年9月	COCET (全国高等専門学校英語教育学会) 第35回研究大会 (会場 京都テルサ(京都府民総合交流プラザ))	高専3年生に対して実施した調査から、英語の学習動機は、授業や試験、宿題の期限を守ることが重視されていることがわかった。社会にでてからの英語の必要性は高校生より強く認識されているものの、現状としては英語の学習時間が非常に少ない学生が大多数、英語が嫌いと否定的情意をもつものも多く、継続的に学習に取り組んでいないことがわかる。今後、どのように学習意欲を喚起させられるかが課題であることを述べた。
8. 高専から中等&高等教育を考える	単独	平成24年2月	実用英語教育学会第1回研究大会 (会場 札幌大谷大学)	高専は高等教育機関に所属していることもあり、高等教育政策に影響をうける。例えば、大学を卒業したら仕事で英語が使えることを目指すことや、入試においてリスニングテストや外部検定試験の活用促進がいわれ、達成目標の導入、TOEIC試験の取り組みなどが実施されるようになった。一方で、中学卒業後の学生を受け入れていることもあり、中等教育で抱える問題と共通する点も見られる。以上について、高専での実践例を挙げながら述べた。
9. A Questionnaire Survey to Develop a Regional Program of Sending Students to Exhibitions Abroad as Volunteer Interpreters	共同 (ポスターセッション)	平成29年10月	ABC (Association for Business Communication) ABC 82nd Annual International Conference (開催地:アイルランド ダブリン Royal Marine Hotel)	(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) グローバル人材育成 (大学生の商談会通訳ボランティア派遣事業) 学生意識調査結果からの、今後の学生ターゲット層とこれからのボランティア派遣ブラッシュアップに関する発表を行った。 (共同発表者) 内藤永、坂部俊行、三浦寛子、柴田晶子、石川希美、山田政樹

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(口頭発表) 10. 大学生のボランティア活動における英語使用事例	単独	平成30年2月	実用英語教育学会第7回研究大会 (会場 札幌大谷大学セレスタ札幌キャンパス)	2017年冬季アジア札幌大会にボランティアとして参加した学生2名の英語使用事例研究に関する発表を行った。
11. 3x3 Table English Training Method for Improving a Quick Response at Business Scenes	共同 (ポスターセッション)	平成30年10月	ABC (Association for Business Communication) ABC 83rd Annual International Conference (開催地:米国マイアミMarriott Biscayne Bay)	(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) 9マスの表を用いた英語即時レスポンス力を伸ばすトレーニングメソッドに関する発表を行った。 (共同発表者) 内藤永、坂部俊行、山田政樹、柴田晶子、 <u>石川希美</u>
12. ビジネスシーンにおける即時レスポンス力を高める「9マス英会話」メソッド	共同 (ポスターセッション)	平成30年12月	第1回JAAL in JACET学術交流集会 (会場 高千穂大学)	(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) 9マスの表を用いた英語即時レスポンス力を伸ばすトレーニングメソッドについて、実施前後で語数の伸びや成果に関する発表を行う。 (共同発表者) <u>石川希美</u> 、三浦寛子、内藤永、坂部俊行、山田政樹
13. 3 X 3 Table English Training Method for Improving a Quick Response at Business Scenes Part 2	共同 (ポスターセッション)	2019年10月	ABC (Association for Business Communication) ABC 84th Annual International Conference (開催地:米国デトロイト)	(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) 9マスの英語即時レスポンストレーニング前後でアンケート調査を実施したところ、英語で話すことに対する抵抗感が下がるなど肯定的な結果がみられた。 (共同発表者) 内藤永、坂部俊行、山田政樹、 <u>石川希美</u> 、柴田晶子
14. 「ビジネスシーンでの即時応答力を高める9マス英語訓練」	共同 (ポスターセッション)	2019年12月	第2回JAAL in JACET学術交流集会 (会場 高千穂大学)	(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) ビジネスシーンでも的確な説明を英語でできるようになるためにペアワーク型のトレーニングから見られた変化を発表した。 (共同発表者) 内藤永、坂部俊行、山田政樹、 <u>石川希美</u> 、柴田晶子
15. ‘Text Mining to Analyze Spoken Vocabulary Tasks’	共同 (オンライン発表)	2020年10月	ABC (Association for Business Communication) ABC 85th Annual International Conference (開催地: オンライン)	スピーキングトレーニングの事前・事後の発話についてテキストマイニングを使って分析した。使用語彙の変化などが見られた。 (事前提出用字幕付き発表動画の作成、当日の発表に参加) (共同発表者) <u>石川希美</u> 、山田政樹、坂部俊行、柴田晶子、内藤永

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(口頭発表) 16. 即時応答力トレーニングによる変化はどのように表れるのか—発話のテキスト分析から	共同 (オンライン発表)	2020年12月6日	第3回JAAL in JACET学術交流集会 (会場 東京、オンライン)	スピーキングトレーニングの事前・事後に実施したスピーキングテストを定性的に分析したところ、事後には語句だけで伝えるよりは、文章として構成する発話が多くみられた。 (事前発表資料、当日の発表に参加) (共同発表者) 石川希美、山田政樹、坂部俊行、内藤永
17. 4技能テスト結果からみる『9マス英会話』のトレーニング効果	共同 (オンライン発表)	2021年12月4日	第4回JAAL in JACET学術交流集会 (会場 東京、オンライン)	(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) 即時応答のトレーニングの前後で、4技能テストを受験した学生50名について調査した。受容技能(読む、聞く)は伸びがみられたが、産出技能(書く、話す)ではスコアの下落がみられた。学生へのアンケートとも併せて分析したところ、このトレーニング(『9マス英会話』)は、やり取りを行っていくことから、正確に意味を理解するという点で受容技能をあげる点に作用していると示唆される。 (当日、リアルタイムで発表した。発表の主担当者) (共同発表者) 石川希美、山田政樹、坂部俊行、内藤永
18. コロナ以降の企業が求めるビジネスコミュニケーション力の変化—予備調査(プレアンケート調査とプレインタビュー)結果から—	共同 (対面)	2022年12月3日	第5回JAAL in JACET学術交流会(会場 大阪府、立命館大学茨木キャンパス)	(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) 本研究は、デジタル技術の発達とコロナ禍がビジネスコミュニケーションにもたらした影響と変化について、予備調査結果を発表した。翻訳アプリ等の言語的な支援ツールの活用により、業務が効率化している一方で、オンライン会議では、話し手の態度や聞き手の理解度などを把握することや信頼関係の構築が困難であることが明らかとなった。英語支援ツールの活用度合や目的は業務内容によって異なること、リアルタイムの文字コミュニケーションであるチャットの有用性、文化的背景の異なる相手との相互理解を向上させるための確認作業の増加が示唆された。 (共同発表者) 石川希美、山中司、山田政樹、三橋峰夫、三木耕介、小川洋一郎、内藤永、寺内一

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
<p>(口頭発表) 19. 「企業が求める英語コミュニケーション力～ポストコロナ社会におけるテクノロジーの普及と新たな課題」</p>	<p>共同 (対面)</p>	<p>2023年8月31日</p>	<p>JACET 第62回国際大会 (会場 東京、明治大学 神田駿河台キャンパス)</p>	<p>(共同発表につき本人担当部分抽出不可能) 本研究は、ビジネスコミュニケーションにおける影響と変化に関する本調査のアンケート調査結果を発表した。 英語の業務に苦勞しながら対応している人が6割を超え、英語使用歴や使用頻度が低い人が多かったことから、コロナ前後で仕事で英語を使う必要性が生じた方が多く回答された。コロナ禍ではオンライン業務の増加が顕著だが、そのなかでもチャットの利用増加、メールや電話は増加と減少の両極端が見られたことから、確認作業をどのように行うかが変化したと考える。 英語での会議は対面・オンラインの区別なく困難とした回答が3割を超え、英語力にかかわる点が困難と感じる要因になっている。オンライン会議では、英語を正確に聞いて理解することへの困難が明らかとなった。 中年層(35-49歳)は、他の年齢層と比べ英語力は特に低いわけではないが、英語業務への対応度がやや低く、役職者についている割合もあがることから、業務の複雑さや会議での役割が多様化するに伴い、より高い英語力が求められているといえる。英語力と英語業務対応度も関連していて、CEFR B2レベルに達すると対応度が上がる傾向がみられた。 (共同発表者) <u>石川希美</u>・山田浩・山田政樹・三木耕介</p>